

# SHOW HEY シネマールーム

★★★★

## 茜色に焼かれる

2021年/日本映画

配給：フィルムランド、朝日新聞社、スターサウンズ/144分

2021(令和3)年4月15日鑑賞

オンライン試写

Data

監督・脚本・編集：石井裕也

出演：尾野真千子/和田庵/片山友

希/オダギリジョー/永瀬

正敏/鶴見辰吾/嶋田久作

/大塚ヒロタ/前田勝

## 👁️👁️ みどころ

石井裕也監督作品は常に要注意！そして必見！何ともイキで風情のあるタイトルだが、冒頭の交通事故の展開を見ていると、こりゃ社会問題提起作！？一瞬そう思ったが、本作は監督が満を持しての“母親の物語”、そして“愛と希望の物語”らしい。しかし、夫の死後、1人で息子を守ってきたヒロイン（母親）の経済感覚、価値観、そして生き方はそもそもヘン！？息子も副業先の同僚もそう思うのだから弁護士の私がそう思うのは当然だ。なぜ、石井裕也監督はこんな脚本でこんな演出を？

ヒロインの口癖、「まあ頑張りましょう」だけですべての不満を押し込めることができれば苦勞はないが、人間はそうはいかないはず。しかして、「お芝居だけが真実」と語る母親が見せる“ある行動”とは？ラストのラストで見る、茜色の空は一体誰に、どう焼かれているの？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ コロナ禍の今、石井裕也監督の現状認識は？世界観は？ ■□■

石井裕也監督作品はたくさんあるが、私が一番好きなのは商業映画デビュー作になった『川の底からこんにちは』(09年)。同作は主演したヒロイン・満島ひかりの魅力と共に、“奇妙なタイトル”どおりの“奇妙な物語”が絶妙だった(『シネマ 25』164頁)。また、それに続く『ぼくたちの家族』(14年)(『シネマ 33』108頁)も、いかにも石井裕也色の強い作品だった。この両作に比べると、『舟を編む』(13年)(『シネマ 30』未掲載)や『町田くんの世界』(19年)(『シネマ 45』未掲載)は少し平凡。石井裕也監督はコンスタントに作品を発表し続けており、公開待機作として、はじめて韓国のスタッフとチームを組んで製作した映画『アジアの天使』(21年)もあるそうだが、さて、最新作たる本作は？

言うまでもなく、2020年1月以降広まったコロナ禍のため映画界も大打撃を受けて

いるが、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が続く中、つくづく生きづらい世の中になったものだ、と痛感。そんな中、石井裕也監督の現状認識は？世界観は？それは、石井裕也監督が本作に寄せた次の文章を読めば、よくわかる。すなわち、

とても生きづらさを感じています。率直に言ってとても苦しいです。悩んでいるし、迷っています。明らかに世界全体がボロボロになっているのに、そうではないフリをしていることに疲れ果てています。コロナ禍の2020年夏、しばらく映画はいいやと思っていた矢先、突然どうしても撮りたい映画を思いついてしまいました。

しかして、彼が突然思いついた「どうしても撮りたい映画」とは？

### ■□■母親についての物語を！堂々と愛と希望の映画を！■□■

彼が今どうしても見たいのは「母親についての物語」らしい。それについて、彼は次のように書いている。

今、僕がどうしても見たいのは母親についての物語です。人が存在することの最大にして直接の根拠である「母」が、とてつもなくキラキラ輝いている姿を見たいと思いました。我が子への溢れんばかりの愛を抱えて、圧倒的に力強く笑う母の姿。それは今ここに自分が存在していることを肯定し、勇気づけてくれるのではないかと思いました。

しかして、本作に登場する母親は田中良子（尾野真千子）。そして、我が子は中学生の純平（和田庵）だ。本作冒頭に描かれる交通事故のシークエンスによって良子と純平は母子家庭になってしまうが、その7年後、2人はどんな生活を？他方、コロナ禍がパンデミック化していく時代の中、“希望”と呼べるものは一体ナニ？それについて石井裕也監督は以下のように書いている。すなわち、

多くの人が虚しさと苦しさを抱えている今、きれいごとの愛は何の癒しにもならないと思います。この映画の主人公も、僕たちと同じように傷ついています。そして、理不尽なまでにあらゆるものを奪われていきます。大切な人を失い、お金はもちろん、果ては尊厳までもが奪われていきます。それでもこの主人公が最後の最後まで絶対に手放さないものを描きたいと思いました。それはきっと、この時代の希望と呼べるものだと思います。

そんな問題意識の中、彼は「これまでは恥ずかしくて避けてきましたが、今回は堂々と愛と希望をテーマにして映画を作りました」と書いているから、こりゃ必見！

### ■□■加害者が痴呆症だったら？逮捕は？損害賠償は？■□■

「東京・池袋で高齢者が運転する車が暴走し、3歳の女兒とその母を含む12人が死傷した事故は19日で発生から2年となる。」そんな書き出しで、2021年4月19日付産経新聞は「妻と娘の命 無駄にしない」、「遺族、再発防止願い活動」の見出しで、“あの交通事故”を特集した。そしてそこでは、「事故は高齢者の運転のあり方を巡る議論に発展し、免許自主返納の増加に拍車をかけた」、「だが、事故を起こした被告は『車の異常』を訴え続け、無罪を主張。高齢ドライバーによる事故も後を絶たない」と解説したうえ、「遺族は

絶望に加え、悔しさや、やりきれない思いを抱えながら、地道な活動を重ねている」と分析した。同事件で自動車運転処罰法違反（過失致死傷）の罪に問われたのは、旧通産省工業技術院の元院長、飯塚幸三被告（89歳）だが、本作のスクリーン上に登場する加害者の仕事は？年齢は？

本作冒頭、TVゲームのような解説付きで（？）、自転車に乗った30歳のロックミュージシャン・田中陽一（オダギリジョー）が青信号に従って横断歩道を渡っているにもかかわらず、赤信号のまま横から進入してきた車にはねられ、即死するシークエンスが描かれる。スクリーン上には衝突直前の加害者の右足が映し出されるが、その右足は明らかにブレーキではなくアクセルを踏んでいるから、アレレ、こりゃ一体ナニ？

### ■□■それから7年後、良子はなぜ加害者の葬式に参列？■□■

石井裕也監督の演出は、いきなりそれから7年後、天寿を全うして92歳でこの世を去ったあの時の加害者の葬式に、被害者である亡陽一の妻・良子が喪主の有島耕（鶴見辰吾）から参列を拒否されるシークエンスになる。さらに、それに続くシークエンスには、「この喫茶店のコーヒーはまずいんだよね、雰囲気はいいんだけど」と言いながら対面する良子に対して、「これ以上の嫌がらせはやめて下さい」と依頼者からのメッセージを伝える弁護士・成島（嶋田久作）の姿が登場する。

そんな演出が続く中で明らかになるのは、あの時の加害者であった85歳の元官僚は、痴呆症を患っていたという理由で逮捕すらされなかったこと。また、良子は保険会社から支払われるべき約3500万円の賠償金の受領を頑なに拒否したことだ。それは一体ナニ？それが大きな疑問なら、7年後の今、良子が加害者の葬式に参列しようとしているのはなぜか、も大きな疑問だ。

良子が“招かれざる参列者”だということは常識で考えれば明らかだから、良子の登場にビックリした加害者の息子で喪主の耕があきれながら良子の参列を拒否したのは当然だ。すべての遺族にとって、良子の参列は“嫌がらせ以外の何物でもない”と受け取ったのは当然だ。その程度の道理は13歳になる一人息子・純平にも分かるから、「なんであんな人の葬式に行ったの？」と良子に質問したが、それに対して、良子は「まあ頑張りましょう」とワケの分からない返事を返すだけだった。一体、良子の思考回路や神経はどうなっているの？

ちなみに、良子の「まあ頑張りましょう」のセリフは本作に4、5回登場するのでそれにも注目！この言葉の意味は一体ナニ？本作で母親の物語を目指した石井裕也監督はそのセリフにどんな意味を込めているの？

### ■□■この副業にビックリ！こんな負担まで！これでは限界！■□■

若い時は役者で芝居が生き甲斐だったという良子に、何のキャリアもないのは当然。そんな良子の夫亡き後の仕事は、スーパーの中にある花屋のコーナーでの自給930円の

アルバイトだったのは仕方ない。母子が住む市営住宅の家賃が月額2万7000円と安かったのは幸いだが、何と良子は陽一が他の女性との間につくった娘の養育費7万円を陽一の死亡後も毎月支払っていたというから、ビックリ！この母子の生活費は、花屋のバイトの他、何で稼いでいたの？

それをここで書くと大きなネタバレになるので、それはあなた自身の目でしっかりと確認してもらいたいが、良子がシャーシャーと(?)“そんな副業”に時給3200円で従事している姿に私はビックリ！そんな職場での同僚が、糖尿病の持病に苦しみ、高価なインスリン注射を続けているケイ(片山友希)。そんな生活に不満タラタラのケイは愚痴が止まらない毎日だったが、良子はいつもそれを受け流し、「まあ頑張りましょう」と繰り返していたから、何とも不思議なものだ。そのため、ケイは再三良子に対して「なぜ怒らないの？」とぶちまけていたが、さて、良子のホントの気持ちは？良子が賠償金の受領を拒否した理由はたった1つ、「加害者の謝罪の言葉が一言もなかったから」だが、それってどこか変なのでは？弁護士の私がそう考えるのは当然。その点は、息子の純平も同じだったようだが、それでも良子は・・・？

他方、母子家庭の子供が“いじめ”に遭うのは今や常識。そのうえ、良子の副業のうわさが流れれば、なおさら……。石井裕也監督が書いた、そんなこんな脚本によれば、良子にも純平にも次々と不幸が続き、どん詰まり状態になっていくのは当然だ。そのうえ、ある日、市営住宅内で火事を起こしてしまったから、この母子はそこを出て行かなければならない羽目に。こんなことなら、7年前にきっちり賠償金を受領し、夫が支払っていた養育費もさっさと中止にしていればよかったのに……。

## ■□■この再会と展開にビックリ！この母子は2人ともヘン？■□■

3月21日に観た『裏アカ』(20年)でも「偶然的再会」がポイントになっていたが、本作後半からは、ある日、良子が中学時代の同級生・熊木直樹(大塚ヒロタ)に再会するところから摩訶不思議なストーリーが展開していく。『裏アカ』では“表社会”での男と女の“再会”を転機として予期せぬ展開が待っていたが、本作ではあれほど頑なに心を閉ざしていた良子が、なぜか熊木に“淡い夢”を抱くようになっていくから、アレレ……。それに対して、再会した時はえらく誠実に見えた熊木の正体は？

石井裕也監督のそんな脚本に私はあまり納得できないが、更に納得できないのは、ワケのわからない暴力的なヒモ男(前田勝)にいじめられ続けているケイに対して、純平が淡い恋心を示すこと。同級生の中にいくらでも可愛い女の子がいると思うのだが、なぜ純平はケイのような年上のヘンな女に恋心をひょっとして、この母子は揃いも揃ってヘン？

前述のとおり、石井裕也監督は「母親についての物語」を構想し、堂々と愛と希望をテーマにした映画にすると表明していたが、アレレ、これでは……。

## ■□■お芝居だけが真実！そのココロは？■□■

新型コロナウイルスが全世界を席卷する中、映画界は制作面でも公開面でも大打撃を受けたが、本作はコロナ禍が日常となった中での“母子の物語”を綴っていく。コロナ禍ではマスクをつけることは最低限のマナーだが、フーズ業界での営業の展開におけるマスクの着用は如何に？本作には曲者俳優（？）、永瀬正敏が演じるピンサロの店長・中村が、とりわけケイの生きざまに深くかかわってくるうえ、それがひいては良子の生きざまにも大きく影響してくるのでそれに注目！

私は本作冒頭から、夫の交通事故の処理についての良子の対応に違和感いっぱいだし、2人暮らしの中での純平の育て方にもかなり違和感がある。とりわけ、良子の“副業”については違和感というより拒否感でいっぱい。そんなネタでイジメに遭う純平はたまらないのでは？良子と一緒に暮らし、母子間での日常的な対話は続いている純平でさえ、良子が①夫への忠誠心にあつい人なのか、②正義感に燃える人なのか、それとも③単純に我慢強い人というだけなのか、わからなかったらしい。それは、事実上良子のたった1人の親友ともいうべきケイも同じで、なぜ良子がいつも平然としているの？なぜ良子は不満を爆発させないの？なぜ良子は怒らないの？それが最後まで分からなかったはずだ。しかし、それは私も同じだ。

良子を演じた尾野真千子は今や日本を代表する女優だが、吉永小百合ほどではないにしろ、本来美人で率直な役が最も似合う女優。ところが、本作でその尾野真千子が演じる良子はその本性がとにかくわからない。そんな良子は若い時に（アングラ）役者をしていたこともあり、「まあ頑張りましょう」の言葉と共に「お芝居だけが真実」と語っていたが、そのココロは？コロナ禍が広がる中、市民劇団の公民館での公演も制限を受け、ズーム撮影などの工夫が凝らされているが、本作ラストに向けては、なぜかお芝居に目覚めた良子が“ある行動”をとっていくので、それに注目！

そんな良子のお芝居をカメラに収めるのは中村だが、そこで良子が挑むお芝居のタイトルは？その迫真の演技は？ラストのラストになって登場する茜色の空と共に、そのお芝居の意味をしっかり考えたい。さあ、この母子はこれから如何に・・・？

2021（令和3）年4月21日記